



静岡大教育学部付属静岡中の美術の時間に、プラモデルを製作する生徒＝2024年12月、静岡市

経験ない子ども増加
静岡市の中学校で、プラモデルを作る授業が始まった。経済産業省などの調査で国内のプラモ出荷額の8割以上を占め、同市は「模型の世界首都」をうたうが、近年はほとんどプラモを作ったことがない子どもが増えた。市の担当者は授業を通じて「プラモ製作が広まり、ものづくり産業の振興につながれば」と期待する。
昨年12月中旬、静岡大教育学部付属静岡中（同市葵区）。「美術」の時間に、3年生が枠から1センチ満たないパーツを丁寧に切り取り、色を塗り分けていた。「作ってみると楽しくて没頭した」と久保田雛子さん（15）。松本優太さん（15）は「興味あるプラモデルがあれば作ってみたい」と笑顔を見せた。

ものづくり振興 静岡で試み開始

城造営などのため職人が集められ、木材加工が盛んになった。戦前、戦意高揚のための模型飛行機の中心地。1950年代後半、プラスチック製の模型製造が始まり「タミヤ」など世界的なメーカーが育った。
しかし、同市が昨年、市内の小中学生ら約1800人にアンケートしたところ、約7割がプラモを「ほとんど」または「全く」作ったことがないと回答。ゲームやスマートフォンが普及し、熱心にプラモを作る世代が40～50代に移ったというメーカー調査もあった。問題意識を持った市は昨夏、市内の中学校6校で授業にプラモ製作を取り入れる試みを始めた。
授業では、市内に拠点を置くメーカーの製品を使う。付属静岡中では車、恐竜、ロボットの3種類から一つ選び、2回の授業で完成させる。その後の授業で、プラモを使って静岡市やプラモの魅力をPRする方法を考え、プレゼンする。担当の望月理恵教諭（38）は「遊びと区別をするのが難しいが、美術の要素と組み合わせることで生徒の発想力や想像力を養える」と手応えを口にする。
別の中学校ではプラモに加え、ジオラマを作製。プラモと紙粘土を組み合わせ、オリジナル作品を仕上げる学校もある。市は今後、市内全中学校の授業へプラモ導入を目指す。同市産業振興課プラモデル振興係の堀郁矢さん（26）は「プラモは静岡に根付いた伝統的な産業。この先、何十年と続く市の代名詞として受け継いでほしい」と話した。

▲ 2月16日 福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

調べてわかったこと、考えたこと（330字程度）

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

地元に根づく伝統的な産業を受け継ぐ取り組み素晴らしいですね。あなたは、車、恐竜、ロボットのどれを選びますか？

